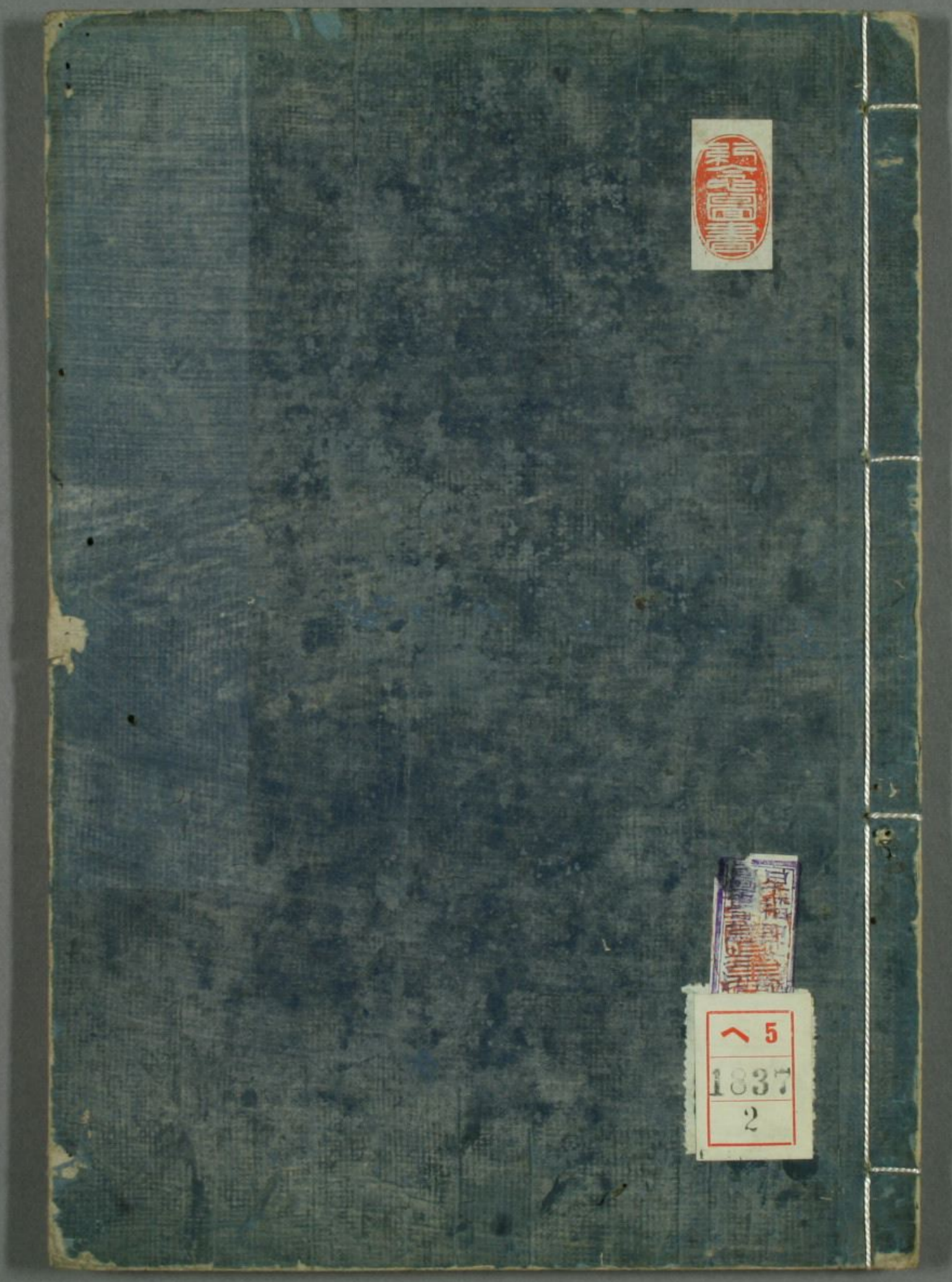
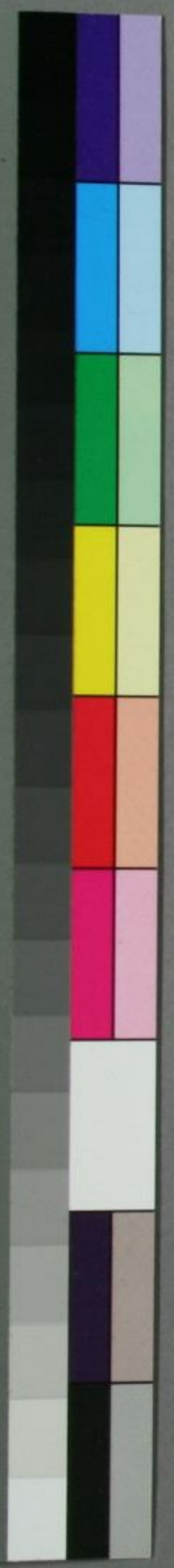


LICENSED PRODUCT

MOHAWK Gray Scale

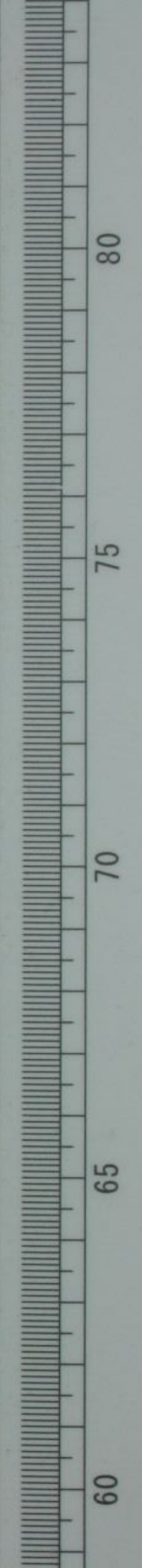
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



^ 5
1837
2

Vertical text on a small rectangular label, likely a library or collection stamp.

Red circular seal with Chinese characters, likely a collector's or library's seal.



1 ~ 5
歌
巻



俳諧一物連歌 下

神祇歌仙

曲小飛小雲も妙好う神楽笛
秋色山藍と明もら婦袖
新座敷列火乃日外清浄小
少らと神戸の風とらるる



津富



初にけは雲は白木綿月晴て
賽乃野は乃あふまき禮
草を堀る菜は心手外つら思
幽事
くくれ
傘の志はし日蔭る糸をさう
う備し乙女と娘はしい多梨
誓ふ人そ根令根の園底志い
鬼す今く島も今ハ伊勢方く

粥占れく多しきよはは好
幣を志お成唯一乃苑
子と母を犯す衆は秘は猫
老くも祢宣の毒をさけ人
焼徳乃敏謙は志を之の教
言くくさく虫く弟いさせ
乱き一の心は注連乃村
別れの小掃箱乃細久そ

遊田ハ其能不及也此能何社
さくら太鼓よむ形深なり
や〜雲霧やその山郭公
天々りるもをむきふ法財
経子不負しと糖婦は海達
醍醐の能ハ素良る 仿
拜願せ新の意ハ依覆あ
くき〜み〜此れを思ふ月

や〜い〜 爰想の念もあま
外ろ〜ふ潔浄妙也 依
凡蓋了因樂くやる所秋川
〜〜少信纏も水乃持てこれ
正直の形ハ襟のうけありや
宙〜〜い〜ある氏子年々
亦廻も幕を捲舞の总结
〜〜や霞も天上靈寶

釈教歌僊

宝馬

南無とて半試法見や夏の付け
菩提すくく言はせよ小苑
山きく踏かふ多き道ありて
鬼童いそぐおてい仕
僧縁不知らは志す道水の月
あふ小頼へ演そ佛の法

旅芝居彼岸れうらの大あを
そくりらをねる先の極楽
思ふ事あはれは任せり宗多
希く不日夢幻泡影
菖いも牡丹の富むは眼出粟の観
まけき水鏡も木魚うら
法皇乃母くおかきふ帝巡禮
分より孝子と化子なりと

東うりー土産とて雲は寝着湯
免おーくくと免を祖 道
月晴く雲の衆障消滅ー
去く俗律も風々聲 聞
+ 園豊えのきえりありみら地あ
凡羽軍乃響ー 免以事
過去未来ありの現をいふらく
捺尾の底を御院も報利も

恒河ゆり魚龍燈よ浮ぶか亭
橋立糸九世戸とろく
伯父は親を依母小善賢を拵る
迦陵頻伽ーのせらまよ喜利
毎ハ凡ハれい美如乃波えて
世乃有為をさるるを月い定ふく
本は善菩薩弟のふらも善事そり
諸悪莫作り空へ入地

良辨の素和ぶ影の冷や地
春日久し神を唐の市娘の
井ありし身吟くは返宿も薄あを
利なきれりともまらふあはれ
笑ふ影の功徳も雲生海度まで
啼く涙おひを安き来し云

哀傷歌仙

素外

世に秋より人影の来り遠烟
たくれをよま多し鳥夕月
日ふ深新海も雲如く泉も
持しちりしをさ海す物言
風乃息を引くて沙岸和や
あふさく杉下冥き途筋

肩成語^ウの中へ推まゝを
生れたりさるの暑盤^ウへ
あつた^ウ涙^ウ面^ウ一七^ウの^ウい^ウ 七日
并^ウ性^ウ也^ウひ^ウさ^ウり^ウ強^ウとも
卒^ウ中^ウと^ウ夢^ウの^ウ誠^ウの^ウ公^ウ事^ウ相^ウ
廓^ウを^ウあ^ウか^ウ凡^ウの^ウ聲^ウを^ウ
月^ウき^ウく^ウ照^ウを^ウ別^ウま^ウの^ウ部^ウ山^ウ
冷^ウく^ウ紙^ウ子^ウも^ウあ^ウり^ウの^ウ教^ウ

身を露^ウけ^ウ細^ウき^ウの^ウ想^ウ歎^ウ戲^ウま^ウ
若^ウ火^ウと^ウ花^ウを^ウあ^ウり^ウや^ウ我^ウ魂^ウ
ゆ^ウく^ウの^ウ築^ウか^ウ一^ウ形^ウい^ウ之^ウ深^ウ川^ウ
是^ウう^ウり^ウち^ウ石^ウ乃^ウく^ウる^ウ一^ウろ^ウ
市^ウ落^ウ馬^ウよ^ウそ^ウい^ウ所^ウの^ウ所^ウ勝^ウ里^ウ
拍^ウを^ウ写^ウお^ウり^ウ火^ウの^ウ中^ウ火^ウ
一本^ウ乃^ウ掃^ウし^ウ茂^ウは^ウ夏^ウ来^ウて^ウ無^ウ
常^ウの^ウま^ウい^ウる^ウ乃^ウり^ウを^ウよ^ウら^ウ啼^ウる^ウ

破脚の上客殿におくら飯
大きれ兼相話の、灰より
雪向る―枯木も癒々しけり
小野―きやゆ―華よ古塚
逢ぬぞく四十九をそむいは免
月よおらる―そ他の提燈
おのれの所は冷き―白樂屋
ある―整葉よ所いけぬ

中^ウ信然屋も小書く奇楠の薫り
古よおらる―ふいぢ屋―せま
を舟よりいふ提のきりぬ
久らぬ旅とちよき 舟玉
岸楓の葉より函美苔より
よりいふ家も時を腫夜

名所歌仙

左簾

^{武苑} 夕暮 野や霞む地上の骨
^{富士} 富士をむくふ 暮遅き里
^{清見} 清見か多鯛釣舟小春のそと
^順 乃後うらぬくこすすく
^{生田} 宋一之無き茶屋茶と幾度
^{流坊} 密にハ松乃木ありかす海

^裏 水戸 途は冥路の神の響く上
^{磐石} 磐石のいそも何果るる
^{文野} 文野の思ひ心枯き花掛葵
^定 定 森のたぬき 里居寂し
^{夕羽} 夕羽 入月乃あふ雲の中 雲成
^{筑波} 筑波 舟ゆく林鹿の音
^{奈良山} 奈良山 林乃田の山あり
^{信支} 信支 近宮年乃いそ思後暮るる

奈吉海

稚子能くしし目付をあらうて

志賀

れもせぬ考る妻の生理志の

難波

に候名を花折世に能提札

武庫

名 教の字をひすし教やう心 辨

春日

の耕す業も永よ日暮

伏見

武士をふらひし大士の僕

与謝

堂字乃秋さ吹井乃耳子付

徳田

風半の字乃當ありし家

吹組

類ひるま雪も氷室乃遅様

小野

う路母ら路の字と遊ばすも

十市

信島よ菴を遠しと都より里

三津

砧さし海池水に 月

勝間田

洞く笑ふ勝又まける羊角力

宇治

秋の柳れ園扇もそあふ 海

嵯峨

うね女乃引掃と口もはらう

横川

毎あらうを鐘をうらむ 時

裏山

漏止まぬ志くまはるる松を深きて

長号

をくわうら舞月流る舟

松浦

櫂のほけはくまを積りて經の敷

飛鳥

羽を白う川幸れ山志えん分

吉野

連綿の連歌を苑の葉野まで

六回

不そく六回乃蛙裏白

右各所ニ名所ハ連歌ニ附合セ有テ以附ケ
附合セナキハ附物ニ寄テテ後句名所ヲ附ル

述懐、舊歌仙

得畧

子をもちぬく中くをりし秋の昏

月のこぼるる初るやいり宿

深く来る序も浮世の軌のふて

並みすれりの杖より白 拭

日さうり新命よむまゝの望屋水

苔老ころもは松をさうりよふ

碑ツの文字は、眼鏡をうけて
神ツりら、世もよ、社家る、衰へ
形もゆる、若も、顔の、似こ、事
に、目、通、一、れ、細、お、あ、お、い
當、お、吾、す、多、う、切、お、依、無、麻、の、子
齒、も、深、さ、せ、れ、廿、載、す、お、お、く
お、り、事、愁、い、を、ほ、お、お、お、い
約、ぬ、も、回、一、一、幅、分、り、際、月

代、友、の、年、あ、ら、は、れ、と、氣、れ、泣、さ
眉、ろ、ろ、り、疾、も、い、一、り、跡
劣、ら、一、世、半、身、を、死、乃、七、大、ち
乞、食、旅、も、一、春、吾、も、一、お、一、お
牙、を、輕、く、割、き、い、路、も、雪、滑、て
金、一、一、あ、う、せ、一、一、菴、新、賣、居
割、板、お、玉、の、緒、終、乃、橋、を、一、羅
少、一、一、お、い、お、い、お、い、の、鏡

姑まれ——事い半経——宮仕
生家死る無く恋乃口 癖
むまか——て棚を掛佛の俣住居
せと縁か——し掛るりてれ—
清い浪人菓子もまの以下たれと
こころ乃と恋をなす——きふ刀を
湯う江の月もい——原落りり
之の経乃うまれ家乃菓子

乃れ秋や探訪もきて川路難
う乃乃欠室う借鏡をい測
悪くさし——より何人か懸る中
福川名所もあ——く無く又
物いをを死う——むき——事の由
教乃懐いを述懐かうふ日

賀歌僊

豆う年残すといふこと
崩き次除ぬる吉例
梅の香の自つる物乃長者を
よらうといひ物殊る一うらう
霞返を月よらう多き文を
うらう梅のうらう一うらう十分

素外

一人乃富も何多うを注一と
講う伊勢の田うけく杖
唐のしほつとある月れ
昔のうらううらう魚唐の
恙の好よ書きていふ多
信やら佛の屋う生る魂月
先ん終る室のなを
編をすうらううらうくま

よ、愛を力せり。影、床を扱ひ事
刑在り。き酒海をふす
そを春あはのるも死の運
を川日影とを津島位れ朝
聲く。子陽音。あつふ千を
病後の食事。大まふとそく
動當れ。あつふひ。あつふ
天下。春。平凡。雪。と。水。像

あつふ。あつふ。あつふ。あつふ。あつふ
郭子儀。と。あつふ。あつふ。あつふ
又。あつふ。あつふ。あつふ。あつふ
花。あつふ。あつふ。あつふ。あつふ
あつふ。あつふ。あつふ。あつふ。あつふ
二度。あつふ。あつふ。あつふ。あつふ
あつふ。あつふ。あつふ。あつふ。あつふ
千秋。あつふ。あつふ。あつふ。あつふ

神祇之部
常解あれハ又常乃乃少古
帰る神せりヤある初ら
室もいれり藝乃乃かすく
陰をうす節もあやうれ尚齒會
末永き日れあう一鶴亀

附録要句

神祇之部

初年の物子や爰も馬場乃隅 亀文
日冬入る人下す一老川社 冠車女
水多れ鴨川もさ下一爰もらく 亀齧
おり一ろと思しあむ初ら 文雀
左川年や梅乃木陰能油屋 祇井
世を松乃内外信浄せりの苑 亀全

神凡子威をます梅れをいふ
神本も式部威せよ本少くも次
初午や老も巨燧をおく
神風を苗く破るや市田扇
眼くあまふ人わやは戸乃大栗
之ッの灯き尾上の玉う巻腫
神凡や伊勢のいれ字く秋の春
和くくも宮居おららの世屋
志く梅や文司教乃古屋くろ
山鳥

志き波もほのびきく
本も花乃あまをせ神乃物智く
任吉の神乃供奉くて以や秋
月輝やうみれ群集のころを
新の能りえくも新乃言く
葉を拂ふもや社路の初柳
山まろくさくくも雪
五ッ子れ額あま神乃汗の梅
あくく葉のあま深かす宮
壱

胡每乃まわいや信り神志 梅 栗堂
 野社も神楽やあくと鼓よ 園字
 茂紫く青く赤く 荒社 涼山
 神乃あまもるる智あま平松樹 松山
 霜信一ふきよ一神むく 煮瓊女
 すく一免女高も涼一や川社 琴志女
 初もすくもあけの端の聲八重椿 羽旭女
 掃けの茂紫心ゆるく名や神の場 生沾
 翌や一神のあま川吹よしい風 煮英

春の梅くまこわく一神の場 合浦
 籬倉とて

弓等神す一笛と浦乃松魚く乳 煮人
 曉月北野乃初使海よま紫 杉羽
 月涼一ふれ茎もたらしい川 賀重
 東風くや梅くま香乃神楽神子 煮縁
 つくよ春や北野の部とあ松 笠舟
 神さひぬ録り乳乃十月巻 桂箴
 美あまの慮もはく日や高氏須講 帰風

あし梅小目多川や朱けくを居 煮磨
香も茎よ交る梅の古屋しる 文洞
神木の茂りどくしを 知やしは 煮玉
新の刃をる 吾妻あふや 猪し今 其葉
やすや 威もふおるよ 於神と 一鼎
紅葉あふくち居や 宮居乃 古幣 霞外
こころしや 魚の泡く日の春色を 煮徳
柳葉や ちらく 葉を乃 神こころ 煮以翁
梅くを 吹る居乃 新きしはく おや 吐風

屋よもくしを 煮や 亀戸の社地のみ 菜子
月さくし 早や 住より 常秋燈 枝静
猪の糞乃 森くく ぬりや 神のあふ 芝水
あふく 梅乃 神と 糸乃 柏子可那 菊子
性性の 笛れ 志まうや 朝神と 鞠人
天照し やす日 和ふ 神乃 旅 煮尺
根津乃 春宴よ け 社地ありん 煮分
物の名も 人の 移徒 市 近 宮 過橋
せきよふとの 詞乃 縁乃 常陸等 山虹

釈教之部

辻堂と宗祇と似たりと新月 冬央

欠室の句をかりよ

市身拭嶮裁乃鮎々人外 祇井

四月八日十方世界新茶の都 左為

観とれい物皆涼一唯 栗堂

涅槃舎やとあまの人の春乃顔 亀全

同一雪も伽藍吉りて程 素玉

佛白のうらを雨敷多し 其葉

法乃灯や都の秋乃初新 翠旭女

吟一や紅葉うち小古 素竹

謎くう誕生佛乃捨乃先 吐鳳

ちうぶむや擗一は 素盈

後の母も思ひ欠月乃空 公佐

秘をんまや天上天下東福寺 素人

本く落葉思ふや阿囀の像二本 素調

年くよあさちをけ初は久羅 羽棠

姑乃佛之成——
 物いとて地蔵や
 甘茶もも虫音る
 代糸も考ふ
 あゝこのる者や
 抱きこの佛
 表乃ららふ大沙
 菊貫
 悟るを云佛
 冠車女
 素磨
 又洞
 素琴女
 凍山
 一鼎
 冬嶺

猿も毛乃足らぬ
 香法や
 達平忌や
 蒼々く多川
 福も人合や
 うの岸乃
 春くれ
 胡笑顔
 人々眼を
 足らぬ
 中乃ぬれ佛
 冬乃眼の
 寺や
 銀杏
 西瓜も入
 すれ多
 凍道
 大佛
 縁之像
 仙亀
 素芥
 山鳥
 芝水
 杉羽
 秋明
 素云
 桂娥
 露水

泥中をわくまゝ三佛や蓮の花 園字
 着飾らむも法久時母や茶師堂 松山
 宵かゝく十観れ中より多しお 雅郊
 ちりちりく花らり客の言笑ひ 琴生女
 遠く正や芦枯て宵枯てかゝ 亀仙
 遍糸の後や夜もちりりみくら 素縁
 翹くく先おるかゝや乃所講風 笠倉

哀傷之部

母ありく傍と下山や美まつを 祇井
 苑の足もるるりり身や秋の雪 素磨
 何れ常中候く露も消る露 文洞
 数侍ふ初りの林く美侍り 素琴
 遠火く客もらう静や老女幼 凍山
 誰塚をせられく松の花枝と 素芥
 葉く名を蹟くそや雪をさうとて 素冠霜
 婦刀自の二めくさう。

糸やありぬ衣更忌のはる餅 何来

余はるゝと露ふこがしそ塚のま 栗堂
 薺のるちるねやまの玉乃徳も 亀文
 杉のしや花女う墓にれあう啼 菊貫
 嬰栗よ風をきて苑と詠りう 亀長
 そのさゆやうは若木も落葉時 亀全
 肩よりその重の影かし 雅堂 雅郊
 硯成りさみま書りて
 昔のわしの硯とる日る春乃 雨吐風
 朝うらやなりの珠き苑のさほ 杉羽

述懐之部

徒るそし海を孤り松さう 文洞
 炉のくまやまの老ら後せし 涼山
 老い今幼涼のやうも四ツ限里 雅郊
 上下てぶも榊さうう夫む久 一鼎
 とれこうし多きは似る梅一本 素芳
 青の叢面ゆう尺し日ありし 意徳
 名想く遠うさるせも老角力 意徳

影もはほくらよせく細代ち 菊費
 月乃老をそそえく妹しあまの春 冠車女
 巴うら若し志連はらうり秋の夢 祇井
 老よりく襖もそれまはる野宮 栗堂
 雛形や今いそりしけし月千 素磨
 中よりうきほのちりしりーの苑 亀全
 おの雪い遅まよらん乃をの志葉 素玉
 うけ多く若くしんえの枝様 吐風
 よふ年乃眼も若くと様う那 ^女 兼千

冬木之鳴呼と啼ぬる鳥さく 素調
 杖の杖を何とぬるとや葉川 素え
 志ま身乃若や若よりくふり実の命 露水
 朝うらや老の宿宮への様うを 杉羽
 年そあか卯の老よ我重志無 笠舟
 夏のせし高へいれを多うり舟 徳雨
 霜さきー我え結りー並段中 宜富

懐舊之部

青あししー是しありる都政 葉費
 灯よりし人志し何や窓乃雪 粟堂
 いよしをかりし淋しーあらし若紫 亀全
 踊合しー音も身もーよ今者定離 素芥
 常ハ口をきき人泣たの内裏跡 冬嶺
 我部し古くて好しを月見ふ 吐鳳
 むし同を舞花子唇志がくの雲 素冠
 せし腰や若かろし乃蛇とろり 杉羽
 青草や今を枕るきりくは 合浦

名所之部

皇遊の舟し雪ま川流や旅の欲 亀全
 月よりし又しー冬のすし川 素玉
 春や井堤道乃世河よふく初記 霞外
 舟し野乃春の春のそを其屋の 亀仙
 遊のあよかしてくす人す小船とま 素芥
 実をくしや舞い若いす野の心 素冠
 白鷺のふ夏に来りし角田川 吐鳳

春の富士等好くおちを譲りま祭 亀文
 夕夕や梅酒花の春残後りて 冠車女
 夕夕らばや花のゆるく新吉野鳥 栗堂
 小湊歌子 頌止ミりり中出り拜 右留
 ミより 野や 花の外中し 浪の雪 素磨
 常子 夕夕 富士又言り 枯柳京 涼山
 夕夕 夕夕 夕夕 野や 暮るる 素琴女
 清水や その名も 涼し 俺の文 祇叶
 夕夕 夕夕 粟を 夕夕 夕夕 生駒山 梅静

余花や 夕夕の味まで 夕夕川 可笑
 秋を 夕夕 月か 色し 夕夕の冥 素因
 夕夕 夕夕 虹も 夕夕 夕夕 春 北李
 夕夕 夕夕 地よ 川 夕夕 夕夕 妹脊山 古友
 凡を 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 川 吳曉
 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 崔童
 松名 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 金露
 梅 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 和文
 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 夕夕 紫蘭

うぐいすしちやん入まむ箱根山 亀齡
おとくや霞天下一の字 鏡屋戸 文雀
おのりやや暖るるふり 聖山 祇井
降るるりや時秋この花不その空 文洞
こころ 野の二月来多り天乃時 一鼎
細引等新おとくや日毎の繩の浦 冬嶺
名もあやや雪消の底に角田川 翠旭女
遠くおとく 瀬田の夕やけりくれ 賀重
おとくおとく名やけりおとくすみ多川 巳禮

魚草くくくくくくくくくく 和安の浦 野幣
おとくおとくおとくおとくおとく 淀の月 素尺
おとくおとくおとくおとくおとく 桂川 素條
おとくおとくおとくおとくおとく 川や夕堂 水蛙
おとくおとくおとくおとくおとく 鯨小鮎 希鳳
おとくおとくおとくおとくおとく 伊吹山 素后
おとくおとくおとくおとくおとく 乃森の山 素牛
おとくおとくおとくおとくおとく 那須乃系 帰鳳
春日野乃里おとくおとくおとく 志摩 今香

塩竈のさびてや、千代乃夕霞 菊
 平のまきくや、はくし次朗石 冬
 舟もあふ残夕越雪乃、松乳山 雅郊
 月を待のまきく、のけ若野 琴志安
 来くたれいまよ、秋か、茅野山 菜子
 こり次磨の波ふ素、ある砧くれ 杉羽
 鴨も川や、鏡く比乃、くろ 卜人
 和弄の浦や、苦や、春乃松宿 芦鐘
 朝霧れ次も、く、松千島 宜宿

賀之部

民謡の時や、耕——秋ぬえ 粟堂
 おさほるや、まきく、堯乃も鼻毛 素磨
 王姫よ、れ、粉や、いとま、松の鈴 素琴女
 四十の賀
 老とよ、名い余は、く、若み、く 涼山
 先之、後く、氷の、あや、免よ、下、蜘蛛 素玉
 人、武士、袴着の、子、れ、え、と、 雅郊

七福やうきふたはる花のき 菊
 市代る花や天小福も給のき 亀文
 三出婦をさふ祝をむこつる 冠車女
 言ふ妙の松ハ臣燧の厨と 姥 冬央
 若きくく松ハ儂ひて出年賀 亀長
 うし福さうり百枝乃松ハ重れ空 文佃
 年くや市代を實生の八重の葉 亀全
 画工の年賀よ
 出春も又久くよ祝乃壽 一鼎

子ハ粒く福録夢もも草々相 素芥
 新宅よないうらら冬さり空 冬嶺
 不らも祝く年の改よ移る雪 素英
 五百さうり齡のせふ亀小屠獲 吐鳳
 不葉のんやあしをもあれ春 祇叶
 市代経くこ年のも重も氷室が 杉羽
 賀を祝ふんや傳はる一年の苑 麴人
 壽ハ人乃さし言し葉乃圓 上人
 松年の晩給やう給乃祝ハ餅 輕舟

十二哥仙員外
魚鳥歌僊

クナラ 鳥遠くちても雲乃岸楼 素外
クマタカ 涼く又之はぬる平江乃魚 津富
コアユ 風光る砂小嬰女思あゆませく 宝馬
スボン 鞠よりよひ日すすめても来は 左簾
カジカ 将涼し幽ふ物新夕月秋 得器
ウヅラ 夜もし律の調子うつらせ 素外

裏
ヒシコ 白序捲く世のひしき母老麦 津富
ジウシマツ 始終始末乃生人婦老らく 宝馬
ヨコジ 思ひさほろ経るを極えて 左簾
カラス 風入ま時の暑からす 雲 得器
ハモ 秋は河系乳の露新水遊云 宝馬
マシユ 一つ道の清い雨の車四五輛 津富
ナヨシ 争ふれり市川新晴る月 素外
シヤム 新絲懐志やせりと新造る 左簾

カサゴ 暖き付道はまゝに袷着多 得器

ハラウ 名を母して川西園乃北 素外

カナガシラ 笑續く是事なく白雪も 津富

コガラ 庭うす心は白き 宝馬

名ツグミ 舟の着砌をよまは漢屋も 左簾

アマタヒ 又物ありて引よせし 細 津富

イカルガ 頬染りていふ教は法花も 素外

ウナキ 奇妙な義理も丸山乃君 得器

ヒヨコ 物ありて様をさせる占うる 宝馬

サケ 禪ありて厄避は 有り 左簾

シヤコ 泣きもも星や今宵乃年限已 得器

シロ 任善画一美けく世家氏 宝馬

クヒナ 川義より鄙よりうら 大系 津富

キス けしむくお次雲をくらふ 群 素外

カケス 残月の杉は新透ぬ後乃峰 左簾

ナマツ 味をふ狂先秋を 知 得器

裏

ニハタキ

宿まろくの馳走よはまきりくは素外

コナカツラ

下男まろく侍か勝尾 寺 津宿

キツハキ

台水乃笈よまあつく来ては流道 得器

ツナジ

鉄炮玉き續りそつか 左簾

タイボウ

新道唯異邦乃道は玉丸苑 宝馬

コシ

美戸せらついで禮をとるす春 執筆

市隊日玉池乃菴主を討ふは窓下乃
 ル上ノ十二款仙の精あり採て刃は
 誹談林新五和也各物唾まき一季又
 一事代集終事それくの部類巻成通
 して知るるり一志春春日れ興るり
 るををきらや幸ひの師の席われは遠くて
 当由は志す人尔刃をる舞と何れらふ
 々々社友好そ外をいかるらひおのせ

欽仙忠類ノ事ノ傳ノ自ノ一ノ或後ノ録ノ
平ノ由ノるノ事ノ及テ行ノ是ノをノ熟ノ讀ノすノ傳ノ
いノしノ中ノ此ノ例ノありノとノいノしノ作ノ意ノ今ノ世
祝ノ詞ノ此ノ一ノ物ノ連ノ歎ノなりノとノいノしノ行ノ金ノ
自ノ愆ノ歎ノとノ書ノ肆ノ申ノ極ノ堂ノ子ノ興ノ侍ノ也ノ
實政改元巳酉初夏後 竹雨堂吐鳳

一陽井門人
芦錐按書

二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ
十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ

二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ

三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ

田中茂

